

トランスジェンダーの人々の自己変容過程における経験について

－ 心理臨床場面における支援の在り方を考える －

山下詩織

I 問題と目的

羽入 (2017) によると、「1990年香港において世界性科学会議で採択された性の権利宣言では、『セクシュアリティとは、人間一人ひとりの人格に不可欠な要素である』」という文章で始まる。

セクシュアル・マイノリティ (sexual minority) は、「身体的性別 (sex), 性自認 (gender identity), 性的指向 (sexual orientation) などが、男女二元論と異性愛主義 (heterosexism) 社会の『常識』に対応しない者」(上野, 2008) を指している。「『マイノリティ』には社会の周縁に位置づける差別的ニュアンスがあるため」、セクシュアル・マイノリティに代わって、「当事者自らが誇りを持って呼称し出した『LGBT』もよく用いられる (上野, 2008)」。LGBTとは、L=Lesbian (レズビアン, 女性同性愛者), G=Gay (ゲイ, 男性同性愛者), B=Bisexual (バイセクシュアル, 両性愛者), T=Transgender (トランスジェンダー, 性別越境者) のそれぞれの頭文字をまとめたもので、性指向と性自認に関するセクシュアル・マイノリティの総称である (羽入, 2017)。しかし、このLGBTという言葉については、セクシュアル・マイノリティの人々の性のあり方を網羅したものではないという指摘も多く聞かれるところである。近年、それぞれ異なる性的指向と性自認の全ての人々が「グラデーションの中に位置する (中塚, 2017)」という概念であるSOGIという言葉も使われている。セクシュアル・マイノリティ, LGBT, SOGIなど変化する呼び名や指摘からも分かるように、人格に根ざす性のあり方は個々人で異なる。その中で唯一、現在も医療の領域で疾病として扱われてきたものが「性同一性障害」である。疾患として扱われる性同一性障害概念は、周囲への理解を求める際に役立つなど正の側面をもたらした一方で、「一定の基準を満たさないトランスジェンダーをさらに排除する構造を生み出す (吉澤, 2015)」など様々な負の側面をもたらした。

た。現在は、主に医療の現場で性同一性障害という表現が使われる一方で、社会ではトランスジェンダーという概念が生まれ、疾患として扱うことを脱する流れにある。トランスジェンダーの精神的健康については、特有の孤独感や苦悩があることが研究されている (下橋場, 2016)。しかし、今まで講じられてきたトランスジェンダーへの支援の多くは児童生徒を対象としたものであった。

以上より、全てのトランスジェンダーの人々の精神的健康の支援に向けた臨床心理学的研究が求められていると考える。そのため、本研究では、トランスジェンダーの人々が抱える特有の経験や感じてきたことを明らかにすることを目的とする。

II 方法

調査協力者：トランスジェンダー男性2名。

分析方法：解釈的現象学的分析 (interpretative phenomenological analysis : IPA) を用いて分析を行う。具体的な分析手順は4段階に分けられる (ラングドリッジ, 2016)。

第1段階：トランスクリプトの特定箇所の意味についてコメントを記入する。

第2段階：最初の書き込みを反映し、現れてきたテーマを記入する。

第3段階：より分析的にまたは理論的にそれらを整理する。

第4段階：秩序のあるテーマ表を作成する。

III 結果と考察

紙面の都合上、第4段階で作成したAとBの最終テーマ表のメインテーマとサブテーマの一部のみを掲載する。

Aの最終テーマ表 (一部)

- 1.トランスジェンダーである自身への気づき
- 2.生きづらさの経験
- 3.自己受容について
 - (1) 自己受容の難しさ
 - (2) 自己受容できる瞬間
- 4.求められる支援

Bの最終テーマ表（一部）

- 1.トランスジェンダーであることでぶつかる問題
- 2.自己肯定について
 - (1) 自分自身を受け入れることの難しさ
 - (2) 自分を肯定する経験
- 3.求める心理士の態度・在り方

2人の語りから見えてきた“共通性”と“個別性”

トランスジェンダーの人々が抱える困難のひとつとして自己肯定、自己受容の難しさがあることが明らかになった。これはトランスジェンダーでない人々にとっても大きなテーマになりうる。特に、思春期は、肯定的に自分の全てを受け入れることは難しく、他者から求められる自分、自分がありたいと思う自分、自分がそうあるべきだと思う自分、現実に存在する自分の間で揺れる時期だからである。しかし、トランスジェンダーの人々にとって、その揺れはトランスジェンダーであると気づいた瞬間から、現在、そして未来までの大きな揺らぎであると考えられた。また、トランスジェンダーであるという気づきの経験について明らかになったが、この気づきの経験は、同時に自認している性として生きていくことは許されない経験の始まりであるように思われる。トランスジェンダーの人々は、トランスジェンダーであることに気づいた瞬間から、そのことを抱え続け、このことがより自分を肯定的に捉えることや、他者から肯定的に受け入れられると思うことを妨げていると考えられた。

トランスジェンダーであることでぶつかる現実的な問題や、そのことで感じる生きづらさの中には、トイレや更衣の問題があった。これは、毎日、自分がトランスジェンダーであることを突きつけられる又は自覚する経験であり、一日の中で何度もやってくるその瞬間は、トランスジェンダーの人々の生きづらさをより深いものにしていてと考えられた。非常に身近なことがどれだけ“人の存在”そのものに関わることなのかを、心理臨床家はきちんと認識しておく必要があるのではないだろうか。

このような困難や現実的な問題から生きづらさ

を感じるトランスジェンダーの人々は、自分のことについて話すことに大きな不安や恐怖心を抱えている。Aが、カミングアウトすることで自分らしくあることのできる場所が増えたと言う一方で、誰にでもカミングアウトするわけではないと語っているように、トランスジェンダーの人々にとって、自分のことを話すということは非常にハードルが高いことである。そのような中で、自身を打ち明けることの意味や勇気を心理臨床家は知っておかなければならないと考える。

一方で、語りの内容を詳しく見ていくと、両者が“どのように生きているのか”という個別性も見えてきた。表面的には似たような経験が語られていたが、“普通であること”の意味や嫌な出来事には違いがあった。また、AとBの語りには、自分自身をどのように受けとめて生きているのかということが表れており、両者の違いは、自己受容と自己肯定という言葉で表現されると考えた。

自己を受容することに繋がる経験として、あるがままの自分を受容する他者の存在が両者から語られた。心理臨床家が真に自身を受容してくれたという経験が、トランスジェンダーであるクライアントが自分を肯定的に受け入れ、生きづらさと向き合っていくための大切な一歩になりうると考えられる。

【引用文献】

- ダレン ラングドリッジ (2016). 現象学的心理学への招待—理論から具体的技法まで—. 田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 (訳). 新曜社, pp.14-154.
- 羽入雪子 (2017). 性の多様化—医療を脱したLGBT—. 八戸学院短期大学研究紀要, 44, 41-53.
- 中塚幹也 (2017). LGBTI当事者のケアに向けた学校と医療施設との連携. 三成美保 (編). 教育とLGBTIをつなぐ—学校・大学の現場から考える—. 青弓社, pp.75-97.
- 下橋場幸子 (2016). 性同一性障害当事者が考える人生の意味や目的について—PILテスト (Purpose in Life Test) を用いて—. 岩手大学大学院人文学研究科紀要, 25, 17-37.
- 上野淳子 (2008). 心理学における性的マイノリティ研究—教育への視座—. 四天王寺大学紀要, 46, 73-83.
- 吉澤京助 (2015). 「性同一性障害」概念の功罪—当事者の救済と排除—. 人間文化創成科学論叢, 18, 175-182.